

みんなで子どもを育てる。
その意識で団結しています

丸玉神社宮司

ながい のぶあつ

長井 信篤 さん(55)

過疎化が進む中、地域みんなで子どもを育てようという意識で続けてきました。私が普段地元を離れて仕事をしているだけに、自治会のみなさんが一所懸命に尽くしてくださる姿を見ては、人々の団結なくして祭りは継続できないと実感しています。子どもが一人でもいる限り、祭りは続けていきます。人数の制限はありますが、唐カラ船祭りは地区外のお子さんも参加できます。船も無料でお貸ししますので、事前に神社へお問い合わせください。



写真提供：早水廣雄さん

かごしま 祭時記

帆に古布を使い、守り神の「猿の子」を付けた唐カラ船。→

唐カラ船祭り

南さつま市坊津町泊／丸玉神社
から
ぶね

伝統の節句遊びを復活 男の子の成長を祈る祭り

5月5日の昼過ぎ、坊津町の泊自治公民館から丸玉神社までの約500メートルの道のりを、浴衣に紙兜姿の就学前の男の子たちがカラカラという音を鳴らしながら木製の帆船を引いて歩きます。これは「唐カラ船祭り」の稚児行列。その後、大きな唐カラ船を引く人々、太鼓や三味線に合わせた踊り連が続き

ます。
唐カラ船とは、坊津が中国(唐)との貿易で栄えた頃の交易船をかたどった郷土玩具。男の子のいる家庭では、端午の節句になると、子どもの健やかな成長と幸運を願ってこの船を作り、男の子たちは船を引いたり、競争をしたりして夢中で遊んだといわれます。「海運業が盛んだった享保以前(1716年)からある遊びのようです。戦後廃れていたこの遊びを残したいと考えた篤志家と共に、私の父が発案し、地域の方々の協力を得て昭和52年から泊地区で始めたのが唐カラ船祭りなのです。祭りをきっかけに奉納踊りの一つ「奴踊り」が復活し、唐カラ船が土産品として販売されるようにな

鹿兒島には、古くから受け継がれてきた個性豊かな伝統行事祭りが残っています。今回はそんな伝統行事の中から南さつま市坊津町泊に伝わる「唐カラ船祭り」をご紹介します。

りました。祭りは地域活性化にも役立つと思います。そう教えてくださったのは丸玉神社宮司の長井信篤さん。宮司だった父親の跡を継ぎ、唐カラ船祭りをはじめとする神社の行事を執り行っています。

祭りのメインは、神事と奉納踊りの後に行われる唐カラ船引き競争です。「ヨイドン」の掛け声で船を引いて走り出す男の子たちが横にそれたり、立ち往生したりする姿に観衆から笑いがこぼれます。近くの泊浜へ移動し、再び踊りと船引き競争を行った後、漁船から浜に向かって紅白の餅が投げられ、一帯は餅を取り合う人々の歓声に包まれます。当日は、我が子を参加させたいと里帰りする家族も多く、この祭りによって地域の強い絆が結ばれています。



南さつま市

南さつま市

南さつま市は、平成17年に加世田市、笠沙町、大浦町、坊津町、金峰町が合併して発足した総人口36,154人(平成27年3月末日現在)のまちです。薩摩半島の南西部に位置し、国の名勝「坊津」および坊野間県立自然公園の指定を受けた景勝地のあることでも知られています。写真は国指定名勝「坊津」の双剣石。リアス式海岸が続く坊泊漁港入口にそびえる大小二つの剣に似た奇岩で、歌川廣重が浮世絵の画題にした場所です。